

# 財界ふくしま

# 10

2012年9月10日発行(毎月10日発行)第41巻 第10号  
昭和48年3月14日第三種郵便物認可

2012 October

## 100万人が読んだ “アクアマリン復興日記”が 突然の封鎖!!

Z4-395

雑誌

41(10):2012.10



1 2 0 1 2 0 1 5 3 7 8 1 2

国立国会

2012.09.10

図書館

黒川 清  
国会事故調査委員長が  
二本松市で講演

緊急「県議アンケート」調査結果を全掲載！  
「郡山市への県庁・県警本部移転」に関する  
検証レポート

■カウントダウン総選挙／本誌記者特別座談会  
維新の会から小熊出馬。3区除き全敗で  
民主の凋落鮮明に

■追跡レポート  
キヨロン村「公金流用疑惑」が  
急展開！



### 編集長インタビュー

樋口利行  
相馬郡医師会長



### この人

齋藤高紀  
こころネット(株)代表取締役社長



### 特別掲載

木村政昭  
琉球大学名誉教授



巨大地震はなぜ  
予測されなかったか？

# 復興日記が

# 突然の閉鎖!

いわき市で「アクアマリンふくしま」の獣医師が地元紙に寄稿した記事を発端に、震災や原発事故からの復興を目的に設立された「いわき湯本温泉・ホテルプロジェクト委員会」との論争が巻き起こっている。ホテル委員会では大熊町からゲンジホテルを集め、独自の学説で $0.5\mu\text{Sv}$ 以上の放射線量では発光機能を失うというホテルを飛翔させて、いわきの安全・安心をアピールする狙いがあるものの、生物多様性の観点から遺伝子の攪乱と拡散を招くとの指摘もされているのだ。

## 100万アクセスの人気ブログが閉鎖に

6月21日付のいわき民報の「くらし随筆」の欄に、

「45・7<sup>キ</sup>。この数字は、JR湯本駅から大熊町役場までの直線距離です。

先日、熊川水系のDNAを持つゲンジホテル300匹が湯本川調節池に放流されました。飛翔能力が弱いホテルにとって、この距離はどういう意味があるのでしょうか。

淡水棲生物は河川ごとに遺伝子の違いが見られる場合もあり、むやみに放流すると遺伝子の拡散が起こり、種の多様性を破壊することになってしまいます。善い行いをしていくように見えて、実は環境破壊につながる事ってたくさんあります。

鯉とかメダカの放流などは、ブラツクバスより質が悪いです。

さて、今回の放流は「ホテルは1時間当たり0・5マイクロシーベルの放射線を浴びると光らなくなるので、放射線量が低い」とアピールしたいようですが、本当なのでしょうか? 気になって直接、情報源のホテル専門家の所に乗り込んできまし

た。

話を聞くと、光らなくなるのは20ミリシーベルトぐらいではないかとのこと。こんな数字じゃ、人間でも駄目です。実験内容も問題点が多かったですし。

◇ 専門家が言っているのだから大丈夫と安心しているだけじゃ、足元を掬われます。放射線に関する問題は、各々に理解を深めることが重要です。

(団体職員・小名浜)

という記事が掲載された。

この記事を寄稿したのは、(財)ふくしま海洋科学館「アクアマリンふくしま」(いわき市、安部義孝館長)の獣医師の富原聖一氏である。後に、この記事が富原氏の進退問題に発展するなどいわき地域で大きな波紋を呼ぶことになる。

地元の地域研究グループの「いわき地域学会」の吉田隆治代表幹事は、「彼の随筆はデータに基づいて書いているので大変良かったと思いますよ。科学的にデータを積み上げていけば見えるわけですから安心を与え

100万人が読んだ

# アクアマリン



## いわき湯本温泉の ホテルプロジェクト騒動の顛末とは…

てくれたという点で、彼が随筆に寄稿した点を高く評価したい」と好意的である。

富原氏は、津波でアクアマリンの電源機器が破壊されて公式ホームページで情報発信が出来なくなったため、昨年3月31日から個人ブログの「アクアマリンふくしまの復興日記」でいろいろな情報を発信してきた。このブログは、約1年間でアクセス数が100万件を超えるなど人気を呼んでいた。ところが、今回の記事で7月31日に閉鎖に追い込まれてしまった。

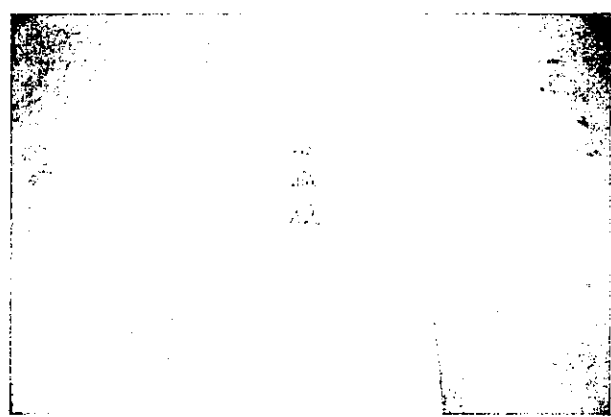
富原氏のブログには、「復興ブログの終了について」のタイトルで、「なにやら最近、ブログの記事に対する圧力がかかっています。更新した記事に対して、経営方針に関わるとの考えで文章の訂正を求められたり、外部からの苦言で画像を消去させられたり…」

大した内容でもない記事（福島県への嫌み）に対して、修正を行うだけなら我慢はできますが、我々現場の人間が本当に伝えたいことまで消去させられるのは我慢できません。多くの読者様と共に歩んできた「ア

クアマリンふくしまの復興日記』をこれ以上汚されたくないと考えこのブログを終了する決断をしました。

特に今、私が取り組んでいる福島県を取り巻く原発問題について、今後、情報発信する際にこのような圧力がかかる可能性があるのであれば、現在の職を続けていくことは私には無理です。

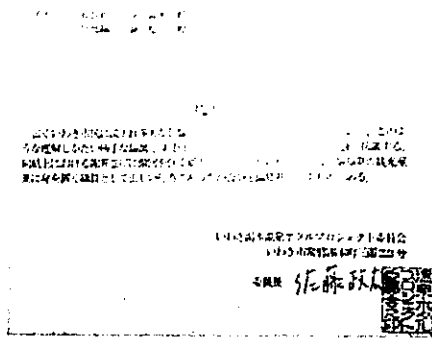
ということ、私の机の上には今、明日、提出する予定の退職願が置かれています」と閉鎖までの経過を書いている。しかも、この日のブログには、自



富原氏のブログに掲載された退職願

身の「退職願」の写真まで掲載し、富原氏が何らかの圧力で退職を覚悟せざるを得なかったことが分かる。その後、7月31日には「退職はしなくすんだ」と首がつながったことを報告している。

ところで、今回の騒動の発端は、いわき湯本温泉・ホテルプロジェクト委員会（佐藤政雄実行委員長。以下、「ホテル委員会」と略す）が、「このような勝手な論調でわれわれの活動を否定し、侮辱した行為に強く抗議する。同紙上における謝罪並びに撤回を強く要求し、受け入れられぬ場合は福島県の観光産業に身を置く職員として正しい行為であったか否かを福島県に正すものである」と抗議文を送ったことに始まる。



ホテル委員会の抗議文

アクアマリンは、事業主体が福島県であり、指定管理者である海洋科学館が管理運営している県立水族館である。富原氏は、その水族館の職員であり、ホテル委員会の抗議文で「福島県に正す」となれば、福島県そのものの問題に発展しかねない。そんな状況の中で紆余曲折があったのではないかと思われる。ただ、この抗議文に対し、安部アキラ館長は、「国内移入種の問題について回答させて頂きましたアクアマリン環境研究所の方針と私の考えは一致しております。全国各地のホテルの放流活動は、私が当時在籍しておりました多摩動物公園昆虫館から始まりました。」

### 湯本温泉商連の「ホテルで復興」という思い

これが、ホテル委員会のプライドを甚く傷つけたようである。ホテル委員会の構成メンバーは、湯本温泉6商店会を中心に、今回のプロジェクトの仕掛け人である㈱ウエルリンクの宮下研一社長に加え、企画顧問の板橋区ホテル生態環境館の阿部宣男館長、「銀河鉄道999フェスティ

ラ始まりました。しかし、分子生物学の進歩により、遺伝子の解析が進む中で、現在は他地域からの生物の放流を極力、行わないように注意を払っております。現在、多摩動物公園昆虫館では、地元八王子に生息しているホテルを導入しております」と一蹴している。

安部館長の回答文

たのです。ホテルはそもそも水質等の環境指標として最適な生物です。ホテルが飛べば、そこはきれいな場所。当然です。阿部先生は知る人ぞ知る「ホテルのカリスマ」。

これまでに伊勢神宮の五十鈴川や鎌倉の鶴岡八幡宮など全国109カ所ホテルが住める環境の再生を行っておられ、ホテルの住める環境作りのプロ中のプロです。さらに、「ホテルは0.5μSv/hで発光器が損傷を受け光らなくなる。ホテルは自然界のガイガーカウンターなんです（阿部施設長）それならばホテルが飛んで光り、さらにそこに根付いて世代交代を重ねられれば、その場所は完全に安全であることが証明されるわけです。美しい光でここを癒してくれるホテルが意外な力を持っている！」とある。

佐藤委員長は、ホテルプロジェクト開催のきっかけを次のように話す。「震災後、ようやく落ち着きを取り戻したので、地元の6商店会で組織するいわき湯本温泉商店会連合会（武藤政昭会長）で旅館こいの小井戸（英典）社長に湯本温泉の現状を

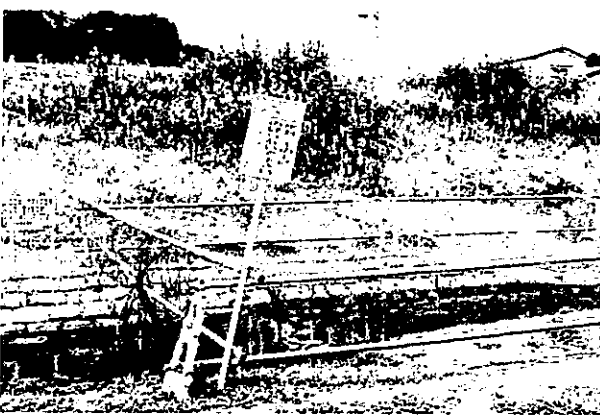


ホタルフェスティバルのチラシ

両得になる。それが何でバッシングを受けるのかというのが地元の人たちの偽らざる気持ちなのがある。

ところで、ホタルを放流することになったのは湯本川の調整池である。湯本川は、明治時代から洪水のたびに浸水被害発

生していた。特に、平成5年の氾濫では市街地を中心に397戸の床上浸水の大きな被害が発生したことに加え、住民の河川改修の要望に応えるために「床上浸水特別対策事業」に着手することになった。そして、この事業によって造られた調整池は、自然と共生するマチづくりを目的に設立された「NPO法人・湯本川を愛する市民ネットワーク会（渡辺弘理事長）が管理運営することになる。現在、調整池は、NPO法人が愛称を公募し、「さはこの水辺」と命名されるなど市民に親しまれるようになった。佐藤委員長は、



現在の「さはこの水辺」

聞いたたら、被災者、工事関係者の1200人が宿泊しているという話だった。これは何かしなければならぬいなとということで商店会と旅館組合で相談して祭りを立ち上げることにしたので。

旅館が潰れたら湯本温泉がダメになつてしまうので、いつか観光地として再生しなければならぬと思つていましたからね。そこに、震災後に店に顔を出すようになったウエルリンクの宮下社長から「ホタルを息させて復興させたらどうだ」という話を頂いたのです。

実は、前から湯本川でホタルが飛び交うような観光地らしいきれいな川づくりをしたいという夢があったのです。我々は、ホタルが飛び交う

には水がきれいであればならないと思つていたので、いろいろなことをしなければならぬと思つていたので。そうしたら阿部先生を紹介してくれたのです。

いわきは、3・11東日本大震災、原発事故以降、放射線量が基準値内にあるにもかかわらず、世界中の人が住めない土地になつてしまったのではないかという風評被害によつて観光客が激減していた。地元では、この風評被害を何とか払拭しようとして「ふくしま復興ホタルプロジェクト」を企画し、湯本川調節池にホタル3000匹を放流しようとしたのである。夜空に光りながらホタルが飛び交う光景は何とも風情があり、これで観光客が呼ぶことが出来れば一挙

と賛成してくれた。

復興のためにいいイベントにしようとしていた時に、この記事ですから。いきなりこんな記事を出されたのは心外ですよ。我々は阿部先生を信頼し、「さはこの水辺」にホタルが飛び交うようになれば、安心して湯

本温泉に来てくれるようになるとうことでイベントを開催したわけですが、圧力を掛けたなん言われていまして納得いかないので抗議文は出しました。何で、こんなことに巻き込まれるのか分からない」と怒りが収まらない。

宮下社長も、

「うちの会社の若松祐二（顧問）が湯本出身だったのでですよ。夕食がま

が折れたという人がいるのでメンタルヘルスをやろうということでは仮設住宅に通っていたのです。たまたま、知り合いの阿部館長が「昔、茨大でホタルというのは0・5μSvで発光器がやられるのをやったんだよ」というので、年間4・38mSvだったら安全でしょう。

ただ、発光器はやられるけど、ホタルは死なないのですよ。安全も分

## 生物多様性の観点から遺伝子の拡散はないのか？

ところで、富原氏が疑問を持ったのは、

「熊川水系（大熊町）のDNAを持つゲンジボタルが、藤原川水系の湯本川調整池に放流されたことで遺伝子の拡散による環境破壊、ホタルが0・5μSvの放射線を浴びると光らなくなることの真偽」

1点目の遺伝子の拡散による環境破壊について、全国ホタル研究会（中村光男会長）の中山盛喜事務局長は、「数年前、全国各地のいろいろなホタルを放流して遺伝子が混乱しているという実態があるという声明を出しています。特に、東京では九州や

かるのであそこでホタルを飛ばしたらしいじゃないですかと言ったのですよ。

そしたら大熊町だったら協力したということになった。それで、阿部先生がわざわざ現場を見に来てくれたのですよ。それで「ここなら大丈夫と思うのでやりましょう」ということになった」

と疾しいところは何も無いという。

## 生物多様性の観点から遺伝子の拡散はないのか？

西日本のホタルが入り交じっているという実態があるので、ホタルを放

流する場合は水系が同じホタルを飼育して放流するようにしないと遺伝子の混乱に人間が手を貸すことになってしまふので控えるようにとは言っています。今回の件も、一般的なことからいえば、それに当たると思

いますね」

と警鐘を鳴らす。環境省の生物多様性ホームページには、

「生物多様性とは、生きものたちの豊かな個性とつながりのこと。地球上の生きものは40億年という長い歴史の中で、さまざまな環境に適応し

て進化し、3000万種ともいわれる多様な生きものが生まれました。

これらの生命は一つひとつに個性があり、全て直接に、間接的に支えあって生きています。生物多様性条約では、生態系の多様性・種の多様性・遺伝子の多様性という3つのレベルで多様性があるとしています」

とある。

更に、生物多様性条約において締約国が策定する生物多様性の保全と持続可能な利用に関する国家的な計画書である「生物多様性国家戦略2010」で、種の多様性について、次のように指摘している。

「近年、人間活動によってさまざまな面から遺伝的多様性が低下していることが指摘されており、個体数が著しく減少した種については、一度遺伝的な多様性が損なわれると、たとえその後個体数が回復したとしても、遺伝的な多様性を回復することは容易ではないと考えられています。個体の人為的な移動・移入による遺伝子の攪乱も、種内の遺伝的構造を乱すことにつながります。

ゲンジボタルの発光周期は西日本と東日本で異なっており、この違い

は遺伝的な特性の違いによるものと考えられています。これは遺伝的多様性の分かりやすい例といえますが、東京都に本来中部や西日本の遺伝的特徴を持ったものがかなり見られ、人為的な持込による影響が示唆されています」

環境省の外来生物対策室の担当者

は、「福島のホタルの遺伝子が、水系ごととどういう差があるのかという詳細が分からないので、一般的な話になるが、当然、水系ごとに遺伝的に差があると思いますので、同じ種であつても安易にやってしまうとそういうこと（遺伝子の拡散）はあるという指摘がされています。環境保全の取り組みをされる際には、遺伝的な攪乱の可能性もあるので注意して欲しいと言っている。

他地域から遺伝的な構造が異なるホタルを連れてきて放したからといって、何か違反になるということはいまのところない。水系ごとにごう違うかという科学的な根拠がないといけないと思うが、その（遺伝子の拡散の）恐れは十分にありま

と注意を喚起する。



放流式

いま、日本では遺伝的多様性が十分に把握されないまま、多くの地域で生物が危機に瀕している。しかし、一度、遺伝的な多様性が損なわれてしまうと回復することは容易ではない。ところが、宮下社長から口を吐いて出た言葉に驚かされてしまった。「阿部先生を信じてやっていけるので科学的にどうだと言われると分かりません。江戸時代には『ホタル商人』という人たちがいて、全国にホタルをばらまいていたらしいですよ。この水系なんて関係ないじゃないですか。それがどうなったかなんてい

う研究が本当にあつたのですかね。復旧・復興の名に隠れた環境破壊と言うけど、これって違うと思いません。彼らの主張が100割で、絶対に正しいのかと。種の多様性の概念は大まかなもので絶対的なもので捉えてはいけないのではないかと。これを錦の御旗のように振りかざされてしまうと何も出来ないですね」

彼らは「水系ごとのデータがないので遺伝的な多様性は損なわれるかどうか分からないではないか」という発想でホタルを放流したのである。阿部館長は「筑波大学の研究で水系は影響しない」と主張しているが、筑波大学の誰が、どのような研究によって明らかにしたかという点について明快な回答を得られなかった。安部アクアマリン館長は、

「一般的にホタルは成虫になって寿命も短いし、移動能力というのも極めて小さいので、同じ小川の中で累代生き続け、同じ遺伝子になっていくことは考えられる。これはホタルに限ったことではなくて、いろいろな生物を放流するということは問題を伴ってくるわけですね。」

多摩に昆虫館を開く時、豊島園の昆虫館から人をスカウトしたのが矢島稔さん(現・日本ホタルの会)で、ホタルの飼育を始めたんですね。当時は、分子生物学が発達していなかったですからホタルをどこから持ってきたなんて問題にならなかった。奥多摩に行けば、ゲンジボタルがいっぱいいましたからね。

夏、光りながら飛ぶホタルは人々に訴えるものがあり、有効だったと思うんですよ。ホタルの増殖の技術が普及したのですが、そのうちあちこちから拙いんだということになっ

## 「自然界のガイガーカウンター」への根拠

さて、富原氏が指摘したもう1点は、「ホタルは本当に0・5μSvの放射線を浴びると光らなくなるか」である。阿部館長は、著書の中で、「ホタルは自然界のガイガーカウンター」

「ホタルが光舞う土地、そこでそれ以下の放射線しかないということである」と主張している。

その根拠は、著書の中で茨城大学での実験結果で明らかになったとい

て、いまは、日野辺りでホタルを飼育しているようです」と語る。

東京都では、ホタルが人為的に持ち込まれたことで、西日本の遺伝的特徴を持ったホタルが生息するようになり、遺伝子の攪乱を引き起したという苦い過去がある。

今回のプロジェクトは、震災復興という名を借りて、結果として多様性を無視して放流したという点で問題なのである。ホタルを里山環境の象徴としていくには、自然環境の保護・保全と再生が第一義なのである。

う。

「それはホタルの発光器にガンマ線を当ててみたときのことでした。ホタルさんが動かないよう割り箸の間に挟んでシャーレに入れ、お尻にある発光器に照射したのです。0・3μSvから徐々に数値を上げていった結果、0・5μSvで発光器内の細胞に異常をきたすことが判明しました」

そして、宮下社長が「それならホタルが光っていれば、その場所の放

射線量は低いということになるんですね」と言うと、阿部館長が「もちろん」と答え、ホタルが光りながら飛ぶと放射線量は0.5μSv以下であると結論づけたのである。安部アクアマリン館長は、一般論と前置きした上で、

「環境系の科学者でも、非常に原理主義的な人と幅広く考える人がいますからね。ただ、科学的に正しくないと人を騙すことになる」と指摘する。

ところで、阿部館長は、0.5μSvで光らなくなるといふのは学位を取得した茨城大学工学部で稲垣照美教授らと行った共同研究の成果だとしている。しかし、一方の当事者である稲垣教授は、

「彼が、うちの大学で学位を取ったので、5年前までは共同研究をしていましたが放射能には全く絡んでいない。放射能とは全く関係なく、人はホタルの光に対してどういふふうに感じているかという研究をしたのです。彼の学位論文にも、私との共著の論文にも放射能との関連は何も書かれていないはずですよ」と完全否定なのである。

この稲垣教授の発言を阿部館長に伝えると「研究は板橋区の環境館で独自に行った」と前言を翻すことになるが、その詳細は後述する。ここでも、その信憑性に疑義を抱かざるを得なくなつたのである。ところで、農学博士の神原充隆氏（独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構・東北農業研究センター上席研究員）が、「むしコラ」というブログで、

「ヒトに比べて昆虫は放射線にむちやくちや強いです。沖縄県で不妊虫放飼が実施されているイモゾウムシの場合、体細胞の分裂が盛んなサナギの時期に80グレイ（＝8万mSv）のガンマ線を照射しようやく「不妊」になる程度です。これは人間なら即死線量です」と指摘し、更に、

「東京電力福島第一原発の敷地内でも（報道どおりに核種の放出がかなり抑えられたのだとすれば）多くの虫たちはこれまでと変わらず、元気に生活できているのではないでしようか。」

ごくごく小さな生物で、生存上大事な器官に放射線がまとまって直撃した場合はこの限りではないでしょ

うが、そういう確率は大型生物のヒトにくらべるとはるかに低いですし、微小生物は個体数も多いことがほとんどで、全体から見ると「ヒトより影響がずっと小さい」と思いますが「」

と、その影響は人間よりも小さいと書いている。

環境省の自然環境計画課でも、「ホタルと放射能との関係については」その話は初めて耳にしましたので、証明されているかどうか分かん

## ゲンジボタルは一族一種。違いは見つかっていない

——ホタルと放射能との関係について、稲垣教授は共同研究のテーマではないと言っています。

阿部 稲垣先生は具体的にお答え出来なかつたと思うけど、私が一緒に（研究を）やっていたのは安久（正統茨城大学名誉教授、福島高専校長）先生の方ですが、4年前に亡くなつてしまった。茨城大も、稲垣先生も、



阿部宣男館長

東海村のことがあるので（ホタルと放射能について）研究は出

らないですね。調べたわけではないのでハッキリしたことは言えないが、昆虫の一般的特性からして人間よりは耐性が強いので普通は考えられないと思いますが、「と首を傾げる。

本誌では、阿部館長に一連の経過を知りたいとして取材を申し込んだが多忙を理由に断られてしまった。後日、再度取材を申し込むとようやく電話取材に応じてくれた。正確を期すため一問一答形式で紹介する。

来ないことになってた。大学として生物に放射能なんて出来ないよねというものがあつた。

個人的に研究するならどうぞということでしたので、直接的には稲垣先生とは共同研究していない。平成16年から18年まで放射線による生物の影響というのは、ここで（板橋区ホタル生態環境館）研究を行っていました。

——つまり、稲垣教授との共同研究のテーマではなかつたのですね。

阿部 誰が研究したかが問題ではなくて、そういう事実があつたという



ことが大切だと思っただけです。簡単なんですよ。

ホテルそのものは強いけれども、年間1mSvから10mSvまで実験を行ったのですが、どうしたら放射線が手に入れられるのと言ったら安久先生が「ピッチブレンド（ウラン・トリウムを含む主要鉱物）が市販されているよ」と言うので、それが1年間超えた時に異変があるかどうかを見てみようかということが始まった。

皆さん勝手に言っているだけで私はひと言も言っていないですよ。私にすれば、ちゃんとした結果があるのに内緒にしておくのはおかしいだろうと。こういう事例もあったよということ。

やった時期は、茨城大学に籍を置いていた時期だよということだった。光のゆらぎという中に放射線もゆらぎだからどうなのかなということ、大熊町のDNAが入っている以上、これはやらなければならぬと思った。

——福島県内には放射線量が高いところもあれば低いところもあります。ホテルが発光しながら飛ばないところ

ろは放射線量が高いということになりませんか。

阿部 大熊町に2回ほど行ったが0.5μSvを超えるところには虫1匹いかなかったですね。

——私は郡山市池ノ台に住んでいますが、この地区は放射線量が比較的高く、現在も0.7μSvを超えているところがあります。虫がいらないところはないですよ。

阿部 私の表現が誤っていましたね。大熊町夫沢は毎時100μSvを超えています。虫1匹いかなかったですよ。たとえ、1個の個体でも異変があったら、やはり、それはあつたということなんです。放射線をどうするかということが先決じゃないか

と思うんですよ。誤解のないように書いていきたいと思います。そこに住んでいる方がいらっしやるわけですから、きちんと認識しなきゃいけないですね。

——ところで、水系の違うホテルを放流することで遺伝子の拡散による環境破壊が起きるといふ指摘についてはどのように考えておられますか。阿部 全く、私は感じておりません。なぜかというところ、ゲンジボタルは一族一

種なのですよ。日本固有のもので、北は盛岡から南は鹿児島までしかない日本固有種なんです。全国で6パターンしか分かれていないとしか言いようがない。どこの遺伝子が違うというのは見つからないですよ。

全国ホテル研究会が移入はよくないと言っただけ人間が一番移入している部分がある。私は、基本的には同じものと判断しているんです。鹿児島のゲンジボタルをわざわざ（いわきに）持つてくるのはいかなるものかという疑問はあるが、同じ福島同じいわきではほぼ遺伝子が変わらないのと、逆に、昔からの遺伝子つてあるのと言っただけなんです。ただ、熊川のホテルの23累代目というのには確かなんですよ。それは屁理屈だと思っ。

——同じ水系のホテルを飼育して放流すれば、遺伝子の混乱は起きないのではないですか。

阿部 私が、いわきに大熊町のホテルを放流したのは希望の灯りを届けなかったこと、もう一つは、故郷をホテルが舞う環境に戻したかったからなんです。遺伝子云々というなら、

当時から遺伝子を見せてくださいという部分があるわけですよ。ホテルを放して環境破壊と言っているのであれば、何を根拠にしているのかを聞きたいですね。

——確かに、正確なデータがないことは間違いないですが、だからといって問題ないということにもならないという指摘があります。分らないから大丈夫だという話ですよ。

阿部 分らないから大丈夫だというのではなくて、現実的に大熊町のホテルだつていうことが分かっているでしょう。いわきにいたホテルが純粋にいわきのホテルかということが知りたかったんですよ。

——水系ごとに違うというデータがないから大丈夫だということがおかしいと指摘したのです。

阿部 日本では水系ごとの規定が全くないですよ。例えば、メダカだつたら水系ごとに別れているのですが、ホテルには歴然としているものがないですよ。全国ホテル研究会は単なる（愛好家の？）集まりだから論文でも何でもなくてグループなんです。それは認めることは出来ない。

# 環境省は水系ごとに遺伝的差があると警鐘

阿部さんの「東北のゲンジボタルの遺伝子は同じ」という根拠は、筑波大学ですよ。

阿部 生命研究科（生命環境科学研究所）です。

筑波大学のどなたに確認したのですか。

阿部 大橋さんという方ですが、もう異動したかな。それも、つい最近の話ではないのですよ。ゲンジボタルというのは、そんなに大きなパターン化のものはない。

ミトコンドリアDNAで分けていくように、ただ雌の遺伝子ではないよね。実は雌や雄が分からないことがあったんです。

環境省の外来生物対策室では「水系ごとに遺伝的に差があると思いますので、同じ種であっても安易にやってみるとそういうこと（遺伝子の拡散）はある」という話でした。

阿部 役人的だよな。環境保全というのは大事なんではないですか。

阿部 それは当然大切にしていますよ。大切にしなければいけないし、大

切にすべきですよ。

いまの段階では、水系の違うホテルを環境破壊につながるので放流してはダメだとも言えないし、放流してもいいとも言えないのではないですか。それをダメと言えないからと進めようという問題があるのではないか。

阿部 それは仰る通り。いわきに關しては、たまたま、そうだったが、ほかでは受けない。いわきは、ヘイケボタルとか、メダカとか、カワニナは湯本川の近郊にいたものを移しているんです。それは当然だと思っただけです。ただ、ゲンジボタルが湯本川近郊にいなかったということだったので、そう（熊川水系のホテルに）しようかということになった。板挟み状態にあったこともご理解頂きたい。

もう一つ疑問に思ったのは、このプロジェクトの仕掛け人が、メンタルヘルズ会社のウェルリンクの宮下社長だったことですね。宮下社長は、今回の「ホテルよ、福島にふたたび」の出版社・アスペクトの会長

でもあります。

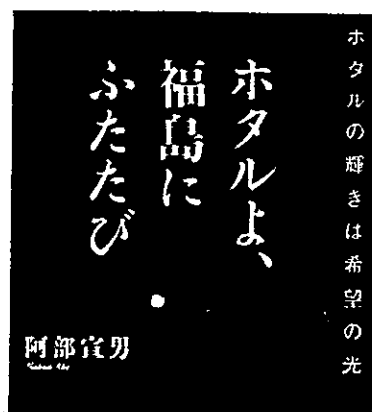
阿部 宮下さんも、誤解は解かなければならないと思います。

私も役人なので出版をする際は、役所に許諾を得なければなりません。印税に

關して一切頂きませんよと、すべて復興のためにお使いくださいということになってる。

でも、委員会はイベント経費を除いて一切かかわっていないんですよ。経費の負担がどうなっているのかを宮下さんに確認したところ、協力金を集めるためにスポンサーを募っているということでした。

阿部 なるほどね。私は、費用がいくら掛かったかについては全くかわりがないことなんです。宮下さんから聞いてもいないし、聞く必要もないのかなと。一番、その辺りについてはしっかりしなければならぬのかなと思いますよ。私は無償で（湯本温泉に）行きましたからね。ただ、工事を行う時はすべて阿



ホテルは自然界のガイガーカウンター

ホテルが光舞う土地、そこではそれ以下の放射線しかないということである。

阿部宣男館長の著書「ホテルよ、福島にふたたび」

部さんの関連業者がかかわっているんじゃないですか。

阿部 もともと、瘤材（るざい）の開発する茨城大学のベンチャー企業だったんですよ。独立法人だったために、その利益を研究費に回していったんです。私は、その会社と全くかわりはありません。

ただ、疑念に思われることは絶対にあつてはいけないことだと思えますね。きちっと、線引きをしておかなければならない。いいことだからということではなく、いろいろな見方があるわけですから見極めて行動すべきだと思つた。

被災地のいわきでホテルの専門家の阿部さんを巻き込んでホテルプロジェクトを企画し、その一方で阿

部さんの本を出版する。当然、その売り上げは出版社のものになるわけですよ。これがボランティアといえるのでしょうか。

阿部 私は印税を一切受け取りませんといいことでサインしている。板橋区の環境課から許諾をもらっているんですよ。私は費用発生に関しては全く関与していないということです。

この研究でいろいろな機材を購入するので、昨年、自己破産しているのですよ。去年8月に地裁で決定が下されています。そんなんですよ。

### 復興目的であっても、自然環境や生活文化の理解は必要だ

阿部館長が、「東北のホタルの遺伝子は同じ遺伝子」と主張する根拠となったのが筑波大学の調査によるものである。ところが、筑波大学のどの研究班による調査なのかも明らかになっていない。

しかも、放射能による発光器の損傷に至っては、誰が研究したかが問題ではないという始末である。

ある人が、「メンタルヘルズ会社、イベント会社、ホタルの専門家が登壇し、今回のイベントに合わせて本

自分は。身銭を切ってやっているのに、そんなことを言われるのかという気持はある。

——ホタル一筋でやってこられた方だからこそ、地元で純粹な気持ちでイベントを立ち上げたわけです。こんなグレーゾーンがあるというのはおかしいと思います。

阿部 私は一点の曇りもないつもりです。ただ、宮下さんが、本の印税をどうしているのか、ちゃんとしなければならぬと言っている。正直なところ、皆さんとそんなに親しいわけではないですよ。

まで出版する。これは復興ビジネス以外の何ものでもない」と言っていたが、その通りではないか。

ところで、岡山県真庭市（井出紘一郎市長）の備中川では、毎年6月に「ホタルまつり」が催される。同市には、「ホタル」が開催される。同市には、日本に生息するホタルは34種のうちゲンジボタル、ヘイケボタル、ヒメボタルの3種類が生息する。今年も、6月に備中川沿いを中心に、県内外から訪れた観光客がホタルの乱舞す

る光景を存分に楽しんだが、ここに至る歴史は並大抵ではなかったようだ。

同市の担当者は、

「ホタルは他地域からの移入は全くありません。すべて自然発生したホタルです。ホタルまつりは、最近のことで、あくまでホタルの保護が目的です。ホタルを通じて自然環境に対する理解を深めると同時に生物多様性の保全に努めています」と語る。

実は、真庭市も、昭和30年代には農薬の使用や乱獲でホタルが激減した。それを行政が中心になって45年ごろからホタルの保護に努めるようになって、地域住民で結成した「ホタルを育てる会」や同市の西部小学校児童会などによる河川の環境整備、啓蒙活動など自発的な保護活動によって再生・復活したのである。いまでは、川沿いの一角には「ほたる公園」があつて、備中川とその支流を天然記念物に指定するなど保護に努めている。行政と市民が一体となってホタルと人間が共存出来るまちづくりを進めてきたからこそ、ホタル観光なのである。



アクアマリンふくしま

いわき振興局の関根昌典商工労働課長は、

「専門的な部分は、板橋区の阿部さんを専門家としてやっていたので生態系についても、もともとないところにホタルを根付かせようということだったので、そういう確認で行いました。今夏で終わりというわけではなく、今後も取り組んでいくという事なのでいろいろな意見に対応していつてもらいたい。」

0・5μSvが揺らぐようなら前面に出すのはどうなのかを今後は考えて頂こうと思っています。地元で



安部義孝館長

今後、話し合う機会があれば、湯本川をきれいな川にする運動は

は一所懸命やって、子供たちもたくさん来ましたし、故郷再生という目的には一歩近づいたと思いますが、ホタルの在り方について実行委員会に再度話したいと思います」と語る。

行政と地域が一体となって地道に努力して自然を取り戻すことが、本来の意味での震災復興につながるはずである。その意味では、アクアマリンは環境水族館であり、自然保護を目的に里山を再生させるために地元と協調していく関係を構築するところが肝要ではないか。安部アクアマリン館長も、

「この震災で感情的な部分もあるし、それを慰めさせるためにもホタルを使ったのは悪いことじゃないですよ。(水族館という)閉鎖環境で累代飼育するというのは研究としてはいいでしょうね。ただ、それをどこかに持つていくというのはどうかなと思う。」

一番大事なのは、やはり、ホタルが生息出来る生態系を創り出すことである。そのためには、地域が一致協力して自然の保護・保全に努めることである。そして、湯本温泉の復活のために、新・ホタルプロジェクト委員会を立ち上げて欲しいものである。(高橋)

立派ですし、ホタルは地元の水系のものを増殖して1回で止めないですつと続けていく施設を造ってやっていくのがいいんじゃないでしょうか」と前向きに話している。

地元も感情的にならないで里山の再生を前提にアクアマリンと協力関係を築くことを願いたい。日本ホタルの会(矢島稔名誉会長)の渋江桂子理事(早稲田大学講師)が、

「ホタルの棲む自然とは、即ちホタルが生息できる生態系であり、ひいては農村文化的要素も含めたホタルが生息している景観である。ホタルを保全する上では、『ホタルが1000匹出た!』ことを喜ぶのではなく、『自然を守ったら、川もきれいになった!ホタルや他の生き物も戻ってきた!』ことを喜ぶべきである」と述べている。

# M ミドリ安全 安全の総合トップメーカー

ミドリの製品は、全国のあらゆる職場で使われています。  
安全・衛生保護具、環境衛生機器、電気安全機器等安全  
関連製品の研究・開発を推進する総合メーカーです。

働く人々の安全に奉仕する  
これがミドリ安全のモットーです。

## ミドリ安全株式会社

本社 東京都渋谷区広尾5-4-3 ☎東京(03)3442-8281(大代)